

ことではないと思っていた。しかし彼女の「殺人出産」という作品を読むことで、悪であるという固定観念を捨て、一から殺人について考えることができた。さらには人間の複雑な感情があるからこそ必ずしも悪とは言い切れないが、悲しみややるせない気持ちしか残らないのだと再確認することができた。

この考えは、私の今までニュースを見聞きするなどした経験と、フィクションである彼女の作品から至ったものだ。

数年後私は、学校という広かったようで狭い社会から出て、会社や地域といった大きな社会を独り歩きすることになるだろう。そうすると、様々な考えを持つ人との関わりが増え、時にはその考え方の違いが採め事の原因になっていくのだろう。

人の考えを聞くとき、この人の考えは浅いな、などと馬鹿にせず自分の考えを豊かにする材料にしていきたいと思う。ましてや自分の考えなどを持たず、他人の考えを批判するだけの大人にはなりたくないと思った。

私は土木職員になるという夢がある。作業だけが仕事ではなく、発注者や依頼者と話し合いをしなければニュースで報じられることもあるだろう。また職場関係者だけではなく、地域住民との交流も大切であることを高校生になって学んだ。交流や話し合いを有意義にするためにも、イベントなどには進んで参加し経験を積み、父に負けないみんなから信頼された土木職員になりたい。

①『殺人出産』	村田沙耶香 講談社	197頁
②『マウス』	村田沙耶香 講談社	241頁
③『授乳』	村田沙耶香 講談社	235頁
④『しろいろの街のその骨の体温の』	村田沙耶香 朝日文庫	319頁
⑤『消滅世界』	村田沙耶香 河出書房新社	253頁
⑥『コンビニ人間』	村田沙耶香 文芸春秋	151頁
	合計	1396頁

## 〈高松キャンパス 夏休み体験文〉

### 優秀賞

## 夏休み体験文

機械工学科2年 福本 遼太郎

バイクを買いました。時代遅れなツーストのレーサーミニバイクで外装もエンジンもボロボロなのを安く買いました。

治す事を前提で、というより治したくてバイクを買った変わり者は少なくともこの学年では自分だけだと自負しています。

そしてこの夏休みは親しくして頂いているバイク屋さんで自分のバイクを治しながら色々な体験をしました。それは、刺激的で有意義なものでした。

お店にバイクを持って行った初日、早速フレームからエンジンを外し、外したエンジンもどんどん分解してい

きました。生まれて初めて見るエンジンの内側、歯車やベアリング、その他様々の部品が無駄なく完璧に計算し設計された通りに整然と組み込まれていました。トランスミッションやシフトフォーク周りの光景は作品と呼ぶに不足のない眺めでした。そこ以外にもミッションオイルがクランクケース内を循環する様に考えられており、何一つ無駄のない空間がエンジンの中がありました。この感動はいくら写真や動画で見ても伝わりはしないでしょう。

それからしばらくすると、お店の手伝い(っと言って雑用程度のことですが)を体験させていただける様になりました。オイル交換やその他簡単な点検、チェーンの調整や交換、タイヤの入れ換え等々どれも初めてのものでした。緊張はするけどやっていて面白かったです。どんな部品でも役割が与えられていて設計した人の意図や考えが伝わって来る様な感じがしました。それと同時に設計がいかに重要かということも身をもって実感しました。

それはヤ○ハ社製のスクーターのフロントフォークを分解整備した時です。オイルシールの抜け防止をしているロックピンがなかなか外れず、メカニックさんと二人ががりでも手こずりました。機械を設計する時はただその機械が役割を果たす様に設計するだけでは駄目なのです。整備のしやすさ等も責任を持って設計に臨まなければならないのです。将来、機械を設計する職に就いた時はこの事を思い出してみようと思います。

(ちなみに、それに比べてホンダ社製の自分のバイクのフロントフォークはとて整備しやすかったです。)

そして9月25日、サーキットを走りたいという念願が叶いました。ミニバイクのシリーズ戦スプリントレースの後、特別にタダで解放されたコースを走らせてもらいました。マシンはお世話になっているお店の「青い稲妻号Ⅱ」です。エイプ100をベースに115ccにボアアップして足回りやキャブなどチューニングしたレーサーエイプです。小さいからとて舐めてはいけません。速かったです。一周目からスピードを出しすぎて、コーナーを曲がりきれずにスポンジバリアに突撃してしまいました。その後もタイヤが流れて一回転倒し軽傷を負いました。

それでもとても感動してしまいました。初めてまともに走った場所はサーキット、初めてまともに走ったミッションバイクはレーサー、免許も持ってない様な奴にこんな貴重な経験をさせて頂いて、とても感謝しています。

この時に新しい目標もはっきりと持ちました。次にここを走る時は自分のバイクで走るということです。公道走行可のレーサーバイクを作るということです。

周りの人や親からは、ただのゴミとか鉄クズとか治す価値ないと言われました。でも自分が治す価値がある、と思ったから治します。周りでバイクに乗っている人達は、ツーリングとかをメインに行っています。そりゃ勿論楽しいと思います。それでも自分はバイクはその程度で収まる乗り物だとは到底思っていない。自分が思う通りに走ってくれる様に整備やチューニングをしてサーキットでバイクの限界に近付けてこそ本当の楽しさが分かる乗り物だと思います。だからこれからもサーキット

に通うつもりです。

そして何よりもこの夏休みにバイク屋さんに通わせていただいて思ったことは「楽しい」という事でした。夏休みが終わってもバイクや車や機械が好きな奴等と一緒に色んな事をしていたいと強く思いました。ツーリングを計画して仲間と走ってもいいし、仲間みんなでバイクを整備したり改造したりしながらチームとしてレースに出てもいいし、とにかく何か一つに狙いを定めてそこにみんなで向かっていけたらどんなに楽しいだろうと、考えただけでもわくわくします。

そんな部活を作りたいなと強く思いました。この長期休暇中に整備の基本をしっかり教えて頂いたのだからに必ず活かそうと思います。

お世話になった店長さんとメカニックさん、ありがとうございました。これからもお世話になります。

## 〈読書キャンパス 読書感想文〉

優 秀

### アドラー的思考

情報工学科2年 澤 青樹

自分澤青樹は夏休みに一冊の本に出会った。そして、この本が自分の思考の根本的な部分を覆し、自分の思考の基盤になるとは思わなかった。そんなこの本のタイトルは「嫌われる勇気」。きっかけとしてはオカンに借りてこーいと言われたのがきっかけではあるが、パッと見て面白そうだったので自分も読んでみた次第、かなりの衝撃だった。是非日本中の、まずは高専生全員に読んでいただきたい本だと思う。

まずこの本に登場する二人の人物を紹介しよう。一人の哲人と一人の青年だ。哲人が「世界はどこまでもシンプルで、人は今日からでも幸せになれる」と謳っている噂を聞きつけた青年はあまりに現実から離れたこの考え方に憤りを覚え、哲人の元に訪ね、論破しに来るところからこの本は始まり、そしてこの二人が夜通し、何日もかけて話し続けるという内容になっている。意外に自分が今まで読んだことのないタイプの内容であったし、なおかつ好きな感じの内容だったためスイスイと読んでしまった。そんな二人の対話の中から二人の発言を聞き、自分の思考は一変した。そんな内容を紹介しようと思う。

哲人が話している内容は、心理学者の「アドラー」の考え方が基本となっており、彼の話す内容は確かに僕自身が目指しているところでもあったし、納得はいった部分も多いのだが、なんだかんだ言って最初はわかりづらい部分が多かった。アドラーの考え方の基本にあるのが、「すべての悩みは対人関係である」ということ。本当にそうかなあ……？と思う部分は多いし、今この文章を見たあなたもそう感じていることだろう。そう思ったあなたは、是非この本を読んでいただきたい。青年のよう

に、この哲人に対し憤りの感情を持って、是非。自分としては、この内容に関して、確かにあなたが間違っていない印象を最終的には持つことができた。自分がどうこう言うよりは是非手にとって哲人に直接問いかけていただきたい。

そんな哲人の考え、アドラーの考え方で最も自分に響いた言葉がある。多くの人の考えの根本に「原因と結果」、因果関係の考えがあると思う。〇〇が〇〇だからこうなった、というような考え方だ。作中の話の内容で、それはそれは、長年引きこもってしまっている青年の友人がいるのだが、なぜ引きこもりになってしまったのかは青年は知る由もなかった。青年は社会に適合できなかったから～とか、親に虐待を受けたから～という想像をしていたのだが、それは先程書いたような「因果関係」での考えで導き出された答えには変わらないだろう。そこで哲人はこう話すのである。

「社会に適合できなかったから、虐待を受けたから引きこもったのでは無く、引きこもりたいからそう言った理由を見つけ出しているのだ」と。哲人やアドラーはこれを「目的論」と定義し、原因と結果からなる因果関係を否定したのである。青年はどう感じたことでしょうか。それはそれは大激怒（笑）。それに対し哲人は

「原因論の世界に生きていては、前に進めない」と答えた。この言葉は自分にとってかなりの衝撃であったし、この本の中で最も刺さった言葉であった。これは自分がこの言葉から導き出した答えではあるのだが、確かに原因と結果、因果関係というものはあるのかもしれないし、あると思うのが自然であろう。しかし、それを考えて現状が変わるわけではないし、仮にそれにすぎればさすがのほど、それによって自分があたかも罷免されているような気分になり、結局それに甘えてしまうのがオチだろう。それならば、目的論で考えてみよう。自分は～だから行動出来ない、ではなく、行動したくないから～という理由をつけている、目的論的言い方であれば、～という目的を後付けしているといったところであろうか。少なくとも自分には、こちらの考え方の方がしっくり来るし、結局現状は変わらないのではないかと思った。自分を変えたい、こういったような人間になりたい、とかいう願望があるなら、自分にとってはいいような気がした。自分の過去の経験でも、結局なんだかんだ言ってやらなかったことも正直なところ多々ある。それに対しての理由付けは、結局のところ言い訳でしかないと思ってしまう。そしてなぜ言い訳をするのかと思ったら、やらなかったことに対する他人からの目を気にしていたり、やらずに現状を納得させるために導き出した理由に他ならない。今、自分を変えたい、目標があるのであれば、自分はこの「目的論」の思考を取り入れることをお勧めする。こちらの方がポジティブであるし、自分の目標としている人間像に近づけると思う。そして、こういう因果関係を用いた理由は先ほども書いた通り、それを言うことで他人に許されると思っている、哲人やアドラーのような「すべての悩みは対人関係である」ということにつながっていると自分は思った。この流れが

自分にとってはかなりの衝撃であった。今自分の置かれている環境が悪いなら、その悪い環境から抜け出す努力をしたらいいし、自分の叶えたい夢があるならその夢に向かって頑張ればいい。結局未来を掴むのは絶対的に自分がやるかやらないかだな、と切に感じた。とはいえ、人間だらけてしまうこともあるし、それこそ人間らしいところであるとも思う(笑)。そういうようなところも含めて人間は人間であると思う。だから気張らずに自然体で、思うように行動すればいいのでは無いかと思う。その中でこういう目的論の考えが備わっていると、ほんまにヤバいと思ったり、これはアカンわと言った時にちゃんと行動できるのではないかと思う。

自分はこの夏休み良くも悪くも様々な経験が出来たし、本や出会いを通じて、たくさん人間と触れることができ、自分の方向性も夏休みに入る前より確実に定まってきたと思う。そう言った方向性に向かって、繰り返になるが気張らずに自然体で頑張っていきたいと思う。そしてこの本を通じて様々なことを学べた上にこれから人間が生きて行く上で非常に重要な考え方であると思う。是非あなたにも手にとって読んでいただきたいと思う。夏休み中は自分が借りっぱなしだったが、夏休み明けには是非手にとっていただきたいと思う。

『嫌われる勇氣』 岸見一郎 ほか 著 ダイアモンド社

## 優 秀

### 「14歳の水平線」を読んで

1年1組 蔵本 英慈

この作品は少し珍しい形で構成されている。一つ目は、主人公が二人いるという点。十四歳の加奈太と、その父である征人だ。加奈太には生まれつきサッカーの才能があった。中学に入ってもサッカーを続けていたが先輩達にいじめられ、結局部活をやめてしまった。征人は人気の小説家だ。征人と加奈太の母は、加奈太が中学に入った後離婚している。二つ目は、そんな二人の物語が交互に書かれている点だ。一つの大きな出来事が起こるたびに加奈太と征人の物語を入れ替えている。このことで二人の話がリンクし、読んでいてとても面白いものだった。加奈太と征人のどちらもが、天徳島という征人の故郷である島が深く関わっている。

加奈太は中学二年の夏、天徳島に帰省することになった。そこで、島についてもっと知ることが目的の四泊五日のキャンプを勧められ、同世代の少年五人と出会うことになる。しかし加奈太ははじめのうち、海江田、栗木、大垣の、サッカーをしていた三人とは上手く付き合うことができず、平林と川口との三人で過ごすことが多かった。栗木達は一方的に加奈太達を馬鹿にしていた。四日目、そんな六人が一つの同じテントに泊まることになった。そこでも栗木達から挑発され怒った加奈太が手を出し、一時は殴り合いの喧嘩にもなったが、川口が喧嘩の

代わりに別の勝負をすることを提案する。その勝負に勝利した加奈太達は栗木達と仲直りすることができた。

征人の方は、加奈太と同じ十四歳の頃の話である。島の友人の孝俊と保生、そして本島から島に引っ越してきたタオの四人で将来の夢を語ったり島に住んでいると言われる「ドゥーヤギー」について調べたりしながら楽しく過ごしていた。しかしある日、征人の父が漁に行きついでに帰ってこなかった。数日後、船だけが見つかり生きている可能性は低いとなったが、征人はそれを受け入れられなかった。そんな征人にタオは、「ドゥーヤギーの体毛には死者を生き返らせる力がある」と伝える。半信半疑ながらも、父にもう一度会いたいと願った征人はドゥーヤギーの体毛を手に入れる作戦を立て、実行に移した。しかしそれはうまくいかず、結局征人の父が見つかることはなかった。

私がこの作品の中で一番好きなシーンは、征人の父が行方不明になった直後のところだ。征人の中では「父は必ず生きている」という思いと「父はもう戻ってこない」という諦めの気持ちがぶつかり合い、虚無感や喪失感に襲われ不安になっている心情がこと細かく描かれている。たとえば、「大丈夫」と同情されたくない。かといって何も言ってくれない人に対しては「冷たいじゃないか」と憤りを感じてしまう複雑な心境。友達と遊んだことで、ほんの少しの間でも父のことを忘れていた自分に対する嫌悪。行方不明になった者をいけにえとして神に捧げることによって、大漁が約束されるという島の伝統に対する怒り。またその儀式をすることで、父が死んでいることを認めてしまうことになる。そんなのは認めない、そんなことは絶対させない。という決心。など、様々な感情があった。それはまるで自分も同じ境遇に合ったかのような雰囲気味わえるほど素晴らしい表現だった。このことから筆者は、感情が不安定な中学生が世間や運命に抗い続ける姿を描き、様々な経験をすることで人は立派に成長できると伝えたかったのだろう。どんなに過酷な試練が来ても、くじけないような強い人間になるためのヒントを教えてくれている気がする。冒頭で征人は加奈太を見て「愚かで純粋で不器用で、常に怒りに満ちていて、自分だけの小さな正義のなかだけで生き、傷つけられることに敏感で、世の中の何者をも味方につけられない、矛盾だらけの十四歳だ。」と語っている。そんな十四歳だからこそ出来る経験があるのではないだろうか。筆者はこのチャンスを逃さないでほしいと考えたのだろう。

私はこのことから、何事にも恐れをなさず、積極的に挑戦してみようと思った。残念ながらもう十四歳を過ぎてしまっているが、様々な経験をするにはまだまだ間に合う年齢だろう。私は将来、高校か大学の講師になることが夢だ。そのためには今のうちから様々なことを知っておいた方がいいだろう。もうすぐ学校の行事で文化祭と体育祭が行われる。まずはそこで、いい経験ができるように努力してみようと思う。

『14歳の水平線』 椰月美智子 著 双葉社

## 優 秀

### 「アンマーとぼくら」を読んで

1年1組 佐竹 櫻

「アンマー？」

私はこの本を見たときに一番最初に思ったことだった。また、表紙のエメラルドグリーンの海の写真に心を惹かれ読んでみようと思った。

舞台は沖縄。リョウは里帰りもかねて三日間おかあさんと沖縄を観光することになる。

リョウの一人目のお母さんはすでに他界していた。二人目のおかあさんと再婚した父である克己も逝ってしまった。

おかあさんと観光をするうちに、リョウはなにかがおかしいことに気付く。

最終日、リョウはおかあさんから写真と父が遺したメモを渡される。それを見てリョウは自分が愛されていたことを知る。

そのあと、リョウはふとあることを思いついた。そして、おかあさんに向けて、

「アンマー」

と、言った。アンマーとは、沖縄の方言でおかあさんという意味だ。その後、二人は森の中の小さな広場に行った。そこでおかあさんは、「カツさんが大好き。リョウちゃんが大好き。二人とも愛してる。」と、言った。その言葉を最後にリョウは現実に戻ることになる。

戻るとおかあさんは亡くなっていた。葬儀を終えて家に帰ると、息子が仏壇の隙間から色紙を見つけた。それは、おかあさんと過ごした三日間に絵描きに描いてもらったものだった。リョウが過ごした三日間は夢ではなかったのだ。

その後、リョウ一家は沖縄に移住することになる。そして沖縄で幸せに暮らした。

この本を読んで一番印象に残ったところはリョウがおかあさんから写真とメモを貰うところだった。中に入っていた写真は父が写真集として出すものだった。メモには、『竜馬へー父より』とあって、これは写真集の前文として載せる予定だった。息子が大切でなければ、自分の写真集の前文に息子に向けてなんて書かないだろう。父親なりに息子であるリョウに伝えようとしたのだ。不器用な父が息子を愛していたことがひしひしと伝わってきた。

また、おかあさんもリョウと父をととても愛していたことが分かる。リョウは両親にこんなにも愛されて幸せ者だなと思った。

もしかしたら、リョウが沖縄で過ごした三日間は両親が自分のことをこんなにも愛してくれていたことを知るための三日間だったのではないかと私は思う。

最後まで読み切った私は感動で涙が出そうだった。また家族の暖かさを知るきっかけとなった。私はまだ十六歳で両親にまだまだ頼らなければ生きていけない、また両親にしてあげられることも少ないだろう。だからこそ今を精一杯生きて、立派な大人になり両親に親孝行した

いと思う。

『アンマーとぼくら』 有川浩 著 講談社

## 〈詫間キャンパス 小説〉

### 最優秀

#### 名前

情報工学科2年 大数賀 こはる

【あらすじ】 走れメロスの邪智暴虐の王も、元は、穢れなき青年だった。賢臣アレキスの目線で語られる、王ディオニスの物語。

父を心から尊敬していた王様は、自分もそうなりたいと願っていた。そのために努力していた王様と王様の臣下、賢臣アレキスは、幼い頃から一緒だった。王様に忠誠を誓うアレキス。「民のための国にしたい」その二人の願いは、妹婿様とお世継ぎによって、王様の父が殺される事によって、崩れていく。二人は、処刑され、事件は終わったかのように思えたが、次は、従弟様が殺され、疑心暗鬼に飲まれた城の者が、犯人は、妹様だと噂し、そのまま妹様とそのお子様も処刑される。信じていたものに次々と裏切られた王様は、だんだんと狂っていく。全ての元凶は、皇后様だと分かったのだが、その時にはもう、手遅れだった。王様とアレキスは、いつの間にか、友人ではなくなってしまっていた。お互いを名前では呼ばなくなり、言いたいことも言えなくなっていた。そして、冤罪をかけられた民を逃がした罪で、アレキスも死刑を王様に告げられる。王様を変えてしまったことを悔むアレキスだったが、賢臣としての最後の使命として、死刑台の上で彼は叫ぶ。

「ディオニス！まっすぐに、君らしく生きろ！」

“蛇のように絡み付いた、妹婿様の呪いの言葉があるなら、君の死んだ心が、再び芽吹くような言葉もあっていと思うんだ。”

アレキスは、そういう思いを言い訳だと思いながらも、それでも本望だと笑う。そして、運命の時。

「罪人アレキスを、死刑に処す」

それが、久しぶりに聞いた、王様のアレキスの名を呼ぶ声だった。

### 優 秀

## TURNING POINT

情報工学科2年 長谷川 諭祐也

【あらすじ】 我々は人生において、過去にいくつもの分岐点を通してきている。それは現在も同様であり、今後もそうなるであろう。例えばアイスクリーム屋に行ったとき、バニラアイスを食べるかチョコアイスを食べるかで